

出品作家略歴

【新収蔵 梅津庸一】

梅津庸一（うめつ・よういち、1982-）

山形県生まれ。当初、ラファエル・コランや黒田清輝といった日本の美術制度の起点となった作品に自らに憑依させた自画像でデビュー。近年ではドローイングや陶芸、版画、映像の制作のほか、私塾「パーブルーム予備校」やイオンのテナントとして「パーブルームギャラリー」の運営、テキストの執筆など活動領域を広げている。一貫して「美術とはなにか？」と問い続けており、作品のみならずそれを取り巻く制度やインフラの両面からアプローチしている。

主な個展に「ポリネーター」（ワタリウム美術館、2021）、「梅津庸一 | クリスタルパレス」（国立国際美術館、2024）などがある。

【『風景画の話』 色・線・構図 作家の視点】

高畠達四郎（たかばたけ・たつしろう、1895-1976）

東京都に生まれる。1913年、東京高等師範学校附属中学校卒業。翌年慶応義塾大学に入学するが、1916年画家を志望して同校を中退、本郷洋画研究所に通う。1921年第3回帝展に入選。同年から1928年まで渡欧、帰国後、1929年第4回国画会展に滞欧作を出品し、翌年会員となるが同年、林武、三岸好太郎らと独立美術協会を創立。1937年帝国美術学校（現：武蔵野美術大学）西洋画科教授となる。戦後は美術団体連合展、読売アンデパンダン展など各展に出品。1952年、東京藝術大学講師となるが、翌年同校を辞して渡欧。1954年帰国。翌年第3回日本国際美術展で佳作賞受賞。1962年から武蔵野美術大学で教鞭をとる。1976年5月、東京・高島屋で大規模な回顧展を開催するが、その1か月後に死去した。

水上民平（みなかみ・みんぺい、1898-1994）

長野県長野市に生まれる。幼少のころ裾花川で描く河野通勢のスケッチを覗き見たことがあるという。県立長野中学校（現：県立長野高校）卒業後、長野市の小学校教員となり、1953年に退職するまで通算34年間勤務した。1922年に病氣療養中に友人の勧めで油絵道具一式を求め、油彩を始めた。1927年友人中山猛夫に誘われ、日本農民美術研究所の副所長として上田に移住していた倉田白羊を訪ね、倉田の勧めで第5回春陽会展に《秋景》を出品、初入選した。以後、国展、大調和展・九如

会・国人社のほか、全信州美術展（のちの長野県展）など各展覧会に出品、90歳前後まで精力的に中央、地方の両面で活動を続けた。

児玉果亭（こだま・かてい、1895-1976）

信濃国下高井郡平穏村渋温泉（現：長野県下高井郡山ノ内町）生まれ。字は士毅。飯山藩の佐久間雲窓に入門し、南蘋派の画法を学ぶ一方、漢学や経学、禅も学ぶ。1866年、家宅が類焼したため全国を遊歴し、のちに京都へ移り、田能村直入に師事して南画を習得する。帰郷後は内国絵画共進会などに出品し、褒状を得るなど全国的に高い評価を博す。以後郷里で制作を続ける傍ら、画室・竹仙山房にて多くの門人を指導した。

臼井剛夫（うすい・たけお、1890-1943）

長野県下水内郡豊井村（現：中野市）の農家に生まれる。本名、寅三郎。旧制中学卒業後、いったん陸軍の連帯に志願兵として1年間入営するが、その後上京し1915年に東京美術学校日本画科に入学、松岡映丘に師事してやまと絵を学ぶ。美術学校卒業後は、1920年に女子学習院に助教授として迎えられ、亡くなるまで教鞭をとる。1927年第7回帝展に《春はゆく》、翌第8回帝展に《山かげ》が連続入選、精妙な描線と鮮明な色彩を特徴としたやまと絵で、官展系画家としてその地歩を固めるが、1943年5月心不全に倒れ、54歳でこの世を去った。

町田曲江（まちだ・きょっこう、1879-1967）

長野県下高井郡中野町（現：中野市）生まれ。本名は春之助。当初は児玉果亭に学び、1897年に寺崎広業に師事、また同時期に白馬会洋画研究所で黒田精輝に洋画の指導を受ける。1907年の勸業博覧会に《仏陀の光》を出品、一等金牌を受ける。同年の文展には《悲報に接したる仏徒の歩み》を出品し三等賞となる。1910年にフランスへ留学し西洋美術を学ぶ。また帰国の途上でインドの仏教遺跡を巡る。仏教や歴史を題にとった作品を得意とした。

東山魁夷（ひがしやま・かいい、1908-1999）

神奈川県横浜市に生まれる。本名、新吉。3歳の時、神戸に引越し同地で育つ。1926年、東京美術学校日本画科に入学。同校卒業後、研究科に入学し結城素明に師

事、雅号を「魁夷」とした。研究科修了後、2年間ドイツに留学して西洋美術史を学び、欧州各国の美術を精力的に見てまわる。1947年《残照》が日展で特選受賞、1950年日展に《道》を発表、一躍「国民的画家」と呼ばれる存在となる。1969年文化勲章受章。日本だけでなく北欧やドイツ、オーストリアの自然や風景を数多く描いた。

不破章（ふわ・あきら、1901-1979）

東京生まれ。1923年第10回日本水彩画会展に初出品、翌年同会会員となる。この頃より、石井柏亭に師事。1927年第8回帝展に初入選。戦後は1947年に一水会会員となり、日展審査員、日本水彩画会理事長、一水会常任委員を歴任する。全国各地の風景を現地で写生した不破は、若い頃から信州にも多く訪れた。師の柏亭が松本に疎開していたこともあり、特に安曇野から白馬方面の風景を数多く描いている。

小山周次（こやま・しゅうじ、1885-1967）

長野県北佐久郡小諸町（現：小諸市）生まれ。1900年、私立小諸義塾に入学、島崎藤村、三宅克己、丸山晚霞らに学ぶ。1902年、晚霞の内弟子となる。1910年頃に上京、太平洋画会研究所、日本水彩画会研究所に学ぶ。1913年、日本水彩画会の創立に加わる。1923年から中国、アメリカ、フランスに各半年ほど滞在する。日本水彩画会や二科展を中心に作品を発表、水彩画を専門とし、その普及と指導に尽力した。

小林邦（こばやし・くに、1906-1990）

長野県南安曇野郡穂高町に生まれる。本名、邦報（くにつぐ）。松本中学校（現：長野県立松本深志高校）時代に画家を志し、1924年上京、川端画学校で学び小杉未醒に師事、帰郷後は宮坂勝に師事した。1930年協会・春陽会を経て、1938年からは国画会に出品、3年連続で国画奨励賞を受賞し、41年同会会員となる。戦後は、1946年第2回日展で特選を受賞した。1974年から信州美術会会長をつとめるなど、地域の美術界にも貢献した。

松井康成（まつい・こうせい、1927-2003）

長野県北佐久郡本牧村（現：佐久市）生まれ。本名は宮城美明（よしあき）。1952年に結婚して松井性とな

る。1957年に妻の実家、茨城県笠間市の月崇寺住職となると、1960年に同寺内に窯を開き、中国や朝鮮、日本の古陶磁を研究。1968年から田村耕一に師事し、田村の助言で練上の技法に特化して翌年の伝統工芸新作展で初出品、奨励賞を受賞する。1973年の日本陶芸展では最優秀作品賞・秩父宮賜杯を受ける。1993年に重要無形文化財「練上手」保持者（人間国宝）に認定された。

武田成功（たけだ・せいこう、1942-2010）

東京都に生まれる。1967年に東京藝術大学日本画科、69年同大学院を修了。藝大在学中、マックス・エルンストの作品に出合い、影響を受ける。日本画制作活動の後、ガラス工芸を手がけていた夫人の作業場でガラスの破片を手にし、ガラスに日本画の岩絵具を溶かすことを思い付き、ガラス作家への道を拓くこととなる。苦闘5年を経て、武田成功独自のパート・ド・ヴェール（ガラス技法）が誕生し、ガラスによる造形作品の創作を続けた。

【新収蔵 中ザワヒデキ】

中ザワヒデキ（なかざわ・ひでき、1963-）

新潟県に生まれる。千葉大学医学部在学中の1983年に第4回日本グラフィック展で入選、1986年に初個展を開催する。卒業後は眼科医として勤務しながら制作を続け、1989年に『近代美術史テキスト』を執筆。翌年に医者进行を辞めイラストレーターとして独立し、CG作品を手掛ける。1997年に肩書を美術家へと変更、2000年に「方法主義宣言」を発表し、2003年のVOCA展で奨励賞を受賞する。2010年に「新・方法主義宣言」、16年に「人工知能美学芸術宣言」を発表、人工知能美学芸術研究会を発足させる。アクリルや立体、CG、脳波など多様な媒体を使用し、独自の方法理論に基づいた制作を行う。

松澤宥（まつざわ・ゆたか、1922-2006）

長野県諏訪郡下諏訪町生まれ。1946年早稲田大学理工学部建築学科卒業、1949年より郷里で教職に就く。1955年渡米、帰国後読売アンデパンダン展で絵画やオブジェを発表。「オブジェを消せ」の啓示を受けた1964年以降は物質から離れ、言語と行為による作品を中心に制作。観念美術の祖としてヴェネツィア・ビエンナーレを始めとした国際展にも多数参加した。